

大学生の国際感覚の涵養と生涯スポーツのきっかけづくりを兼ねた海外ウォーキング実習：韓国に近い大学立地と釜山市の歩行道「カルメッキル」を活用した体育授業の構築

小笠原 正 志

An overseas walking practicum aiming to cultivate international sense and inspire lifetime involvement in sport among Shimonoseki City University students: Designing a physical education lesson that makes best use of Shimonoseki's privileged location close to Busan, South Korea, and the Busan walking trails "Galmaetgil"

Masashi OGASAWARA, Shimonoseki City University

Abstract

Within Japan there is a recent concern that Japanese students are "inward-looking" and less interested in foreign countries. Shimonoseki City University (SCU) is located in Shimonoseki city near the Korean Peninsula, meaning that SCU students can arrive at Busan the next morning following an overnight voyage by ferry. Busan, the second biggest city in Korea, boasts the beautiful walking trails called "Galmaetgil". SCU had taken advantage of these two features and organized an overseas walking practicum to Busan aiming at the cultivation of international sense and inspiration of lifetime involvement in sport among participating students. The practicum has been organized to be an affordable program that combines safety and convenience through careful preliminary inspections and elaborate planning. A total of 24 students, including 15 Japanese, 8 Chinese and 1 Korean, participated in the five-days practicum on July 2016. Except for needing to switch programs because of heavy rain, the practicum was carried out as planned, with every student completing the walk along the mountain ridge course (No.7) and the coastline course (No.2) without physical trouble, despite the heat. Participants reported feeling a sense of refreshment and accomplishment responding with comments such as "I would like to do the walk again." Many Japanese students felt that "Koreans are gentle and kind" and noticed that "there is less anti-Japanese feeling than imagined." Moreover, they noticed deficiencies in their communication skills and showed willingness to engage with the international community making comments such as "I would like to study Hangeul" or "I would like to go to other countries." This practicum can be said to have made progress toward achieving its original aims and has the potential to be applied as a form of sports tourism.

Key words: Walking, University Students, Overseas Practicum, International Sense, Lifetime Sport, Galmaetgil

1. はじめに

本州の西端に位置する下関は、関門海峡をはさんで九州と対し、アジアに近い地理的条件に恵まれていることから、古くから本州と九州やアジアとを結ぶ交通の要所として栄えてきた。とりわけ、下関はアジアの玄関口として朝鮮半島と深い関わりを持ってきた歴史がある。韓国第二の都市である釜山広域市と下関市との直線距離は228km¹⁾に過ぎない。これは下関一広島間の距離にほぼ等しい。

下関には、戦前から下関一釜山間を毎日行き来する連絡船「関釜フェリー」が就航している。関釜フェリーは、大人数にも対応可能で、夜間航行のため時間が有効活用でき、日韓ともにターミナルへの交通アクセスが良く、しかも安価であるという4つの利点がある。

下関市立大学（以下本学と略）は、「現代社会に適応しうる創造的で教養豊かな高度職業人」²⁾を養成する経済学部の単科大学である。朝鮮半島への窓口として恵まれた立地を活かし、本学の学生が釜山で実習を行うことは、急速にグローバル化する現代社会に対する適応への導入として有効と考えられる。

ところが、近年は大学生の海外への興味が薄れる「内向き志向」³⁾が進み、海外留学者数が減少傾向にある⁴⁾ことが指摘されている。こうしたグローバル化の潮流とは逆行する若者心理の動向は、本学においても例外ではない。そのため、本学の授業の一環として、学生が海外で異文化体験する機会を提供することは、グローバル教育の観点からも大きな意義があろう。

一方、「高度職業人」であり続けるには、良好な健康状態を維持する必要がある。そのためには、大学生のうちから健康への関心を高め、健康的なライフスタイルを習慣化し、それを生涯にわたり継続していかなければならない。本学では、新入生の必修科目であるスポーツ実践A（旧カリキュラムではスポーツ実践I）において、2004（平成16）年度から運動実践と平行して「健康になりま帳」を活用した健康づくり教育を行っており、一定の成果を上げている⁵⁾。

厚生労働省は、「1に運動 2に食事 しっかり

禁煙 最後にクスリ～健康寿命の延伸～」という標語⁶⁾を掲げ、運動を健康習慣の最優先として普及に努めている。生涯スポーツ（注1）の観点からも、大学生のうちからスポーツを愛し、自ら実践する態度を涵養することは大学教育の重要な一面であると考えられる。

生涯スポーツは、さまざまなスポーツ種目の中から、強制されることなく各人の趣向に合わせて選択されるものである。とはいえ、例えばサッカー、ラグビー、野球、柔道や剣道といった激しいスポーツは、20歳代のうちは楽しむことができても、30歳代を過ぎれば実施可能な人が次第に減少する。ウォーキングは、費用がかからず、年齢、場所、季節を問わず一人でも楽しむことができるなどの利点から、わが国で最も実施されているスポーツ種目である⁷⁾。自然のなかでの心地良いウォーキング体験は、いずれ学生が社会人となり年齢を重ねたときに、ウォーキングを生涯スポーツとして楽しむ契機となる可能性は高いものと推測される。

韓国では、2007年に済州オルレが誕生して以来、空前の徒歩旅行ブームが起きている⁸⁻¹⁰⁾。これを契機としたウォーキング道の整備は、韓国全土で急速に進み、その総距離は、東京～大阪間の約34倍に相当する17,671km（2013年7月現在）に達している¹¹⁾。今回活用した釜山市内の「カルメッキル：갈매길」¹²⁾や、釜山から東海岸沿いに北上し国境の高城まで約790km続く「ヘパランギル：해파랑길」¹³⁾はその典型例である。ウォーキング専用で整備された道を歩き、数多くのウォーカーと触れ合うことは、隣国の健康づくり政策や国民事情を知り、異文化理解を深める貴重な経験ができるものと考えられる。

そこで、本学の朝鮮半島に近いという大学立地を活かして、国際感覚の涵養と生涯スポーツのきっかけづくりを兼ねた韓国ウォーキング実習を健康・スポーツ関連科目の一つとして構築・実施した。これまで大学授業の一環として、海外で体育授業を行っている実践例は数件報告されている¹⁴⁻¹⁶⁾が、海外ウォーキング実習については、調査できた範囲内では前例がなく、きわめてまれなケースであると断言してよい。

本研究は、安価でかつ安全性と利便性に配慮した海外ウォーキング実習の構築過程と実際を明らかにし、これが学生の国際意識に及ぼす影響について分

析することを目的とした。

2. 韓国ウォーキング実習に活用できる資源

(1) 関釜フェリー

下関と釜山とを結ぶ「関釜連絡船」は、日露戦争(1904年2月8日～翌年9月5日)の終結直後である1905(明治38)年9月11日に就航した¹⁷⁾。これは山陽鉄道株式会社の傘下にあった山陽汽船が運営するものであり、壱岐丸が隔日1往復していた。そのわずか2か月後には、二隻体制が敷かれ、毎日運航されるようになった¹⁷⁾。関釜連絡船の経営は、翌1906(明治39)年の鉄道国有法の発令によって、山陽汽船から鉄道院(後の鉄道省、国鉄、現在のJRグループの前身)に移管された。関釜連絡船は、終戦まで、国際定期航路として日本と大陸をつなぐ連絡運輸の大動脈としての役割を果たした¹⁷⁾。

終戦後しばらくは、大韓民国との間に国交がなかったこともあって、航路が途絶えていた。1965(昭和40)年の国交成立後の1970(昭和45)年6月に25年ぶりの日韓定期航路として関釜フェリーが就航した。

下関の窓口である下関港国際フェリーターミナルはJR下関駅からほど近い。本学から下関港までの所要時間は、バスで30分程度である(図-1)。釜山の窓口の釜山港国際旅客ターミナルは、釜山駅から徒歩圏内(1km弱)にあるが、大きな荷物を所持

して歩くには不便であり、バスかタクシーを使って移動する。

下関港での乗船手続き締切りは19時、釜山港では18時であるので、その一時間前には港に到着していなければならない。そのため、本学の授業を4限目(16:20)まで受けてからでも乗船手続きに間に合う。また、帰国時には下関港に朝8時に到着するので、9時に始まる1限目から受講できる。このように本学は、勉学への支障をきたすことなく、韓国にアクセスできる非常に恵まれた立地条件にある。

下関市は、山口宇部空港、北九州空港、福岡空港にも比較的近く、1時間半から2時間ほどで移動できる。仮に、航空便数の多い福岡空港から釜山最寄りの金海空港へ移動したとすると、福岡空港まで2時間、搭乗手続きや出国審査などの空港待機で2時間、フライト1時間、入国手続きと荷物受け取りなどで1時間、金海空港から宿泊先まで1.5時間、計7時間半、ほぼ丸一日を費やす。そのため、現地で丸三日間の実習を行うと、前後の移動日が必要となるので、丸二日分の時間のロスに加え、船便との差額、二泊分の宿泊費、空港までの交通費、合わせて3万円前後が実習費に転嫁されてしまう。

このように、関釜フェリーを活用できる本学の海外実習は、極めて効率的な授業運営と学生の経済負担の軽減を可能にする。

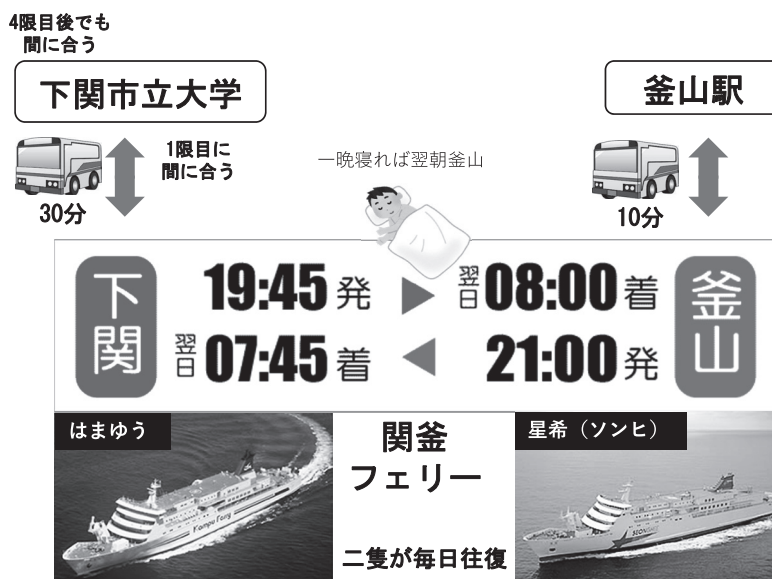


図-1 釜山とのアクセスに恵まれた下関市立大学の立地

(2) 釜山カルメッキル

釜山広域市は、約355万人(2016年)¹⁸⁾を抱える韓国では二番目の大都市である。しかし、都会の喧騒を離れば、南に海、西に大河、北と東に山があり、自然環境に恵まれた風光明媚な街である。

カルメッキル(갈매길)¹²⁾は、2007年に開設された済州オルレ⁸⁾¹⁰⁾や智異山トルレッキル(지리산둘레길)¹⁹⁾の成功に刺激され、2009年に釜山広域市庁自治行政課が中心となって整備したウォーキング専用道(全9コース20区間・278.8km)である(図-2)。カルメッキルは、かもめ(カルメギ:갈매기)と道(キル:길)を合わせた造語であり、市民からの名称公募によって決定された²⁰⁾。かもめは市の鳥でもある。

カルメッキルは、これまで地元の人々に愛されてきた自然歩道を再整備し、断絶箇所をつなげて一連のコースとして体系づけたものである。カルメッキルは、市民の健康づくり実践拠点としての活用はもちろん、観光資源にもなっている。

(3) トレッキングツアー実績のある旅行社

下関市内にある旅行会社であるV社は、関釜フェリーを活用した韓国でのトレッキングツアーやサイクリングツアーなどの旅行商品を2009(平成21)年から販売し、すでに豊富な実績を有している。そのため、本実習はV社と提携することにした。V社は、教員が事前調査で選んだカルメッキルの2つのコースを、すでにツアー商品として数回実施した実績があり、信頼に足るノウハウを有しているものと判断された。しかし、V社のプログラムは、参加数が少ない、暑熱環境下ではない、現地宿泊なし等の点で本学向けの実習に改良する必要があった。

3. 韓国ウォーキング実習構築までの過程

本学では、すでに「教養演習」や「生涯スポーツb」の枠組みの中で、韓国でのスキー実習を2006年度から2017年度までに8回開講している。健康・



図-2 カルメッキル(갈매길)のコース

スポーツ担当の教員2名は、韓国での実習運営に関わる一通りのノウハウを有している。ただし、釜山については、2名とも訪問回数が多いため、地理や交通事情等には詳しいものの、カルメッキルに関する情報は不十分であり、授業を組み立てるには入念な情報収集と準備が必要であった。

学生の経済的な負担を考えれば、経費を最小限に抑えるべきであるが、それによって安全性と利便性が損なわれてはいけぬ。そのため、1) 安全かつ爽快で達成感のあるコース選定、2) 公共交通機関による移動、3) 実習中の安全の確保、4) 暑熱環境への対応、5) 温泉宿での疲労回復に留意して実習を組み立てることにした。

(1) カルメッキルの実踏調査

健康・スポーツ担当教員2名は、実習実施に先立って、2013（平成25）年7月から2015（平成27）年11月までの5度にわたり、カルメッキルを実踏調査した。約280kmの全行程を歩くことは不可能であるが、第9コースを除く残り8コースについては部分的に調査している。

その結果、1) 起点終点の交通アクセスが良く、2) 達成感・充実感が得られ、3) 緊急時の対応も含めた安全性の観点から、広安里から二岐台を通過して五六島までの海岸線を進む第2コースと、釜山の背骨とも呼ばれる金井山の尾根を縦走する第7コースを選択した。

(2) 選定したコースの特徴

①第7コース（金井山）

金井山（クムジョンサン：금정산）は、釜山を南北に走る低山である。金井山の西には韓国最長の大河である洛東江（ナクトンガン：낙동강）、東の麓には温泉場（オンチョンジャン：온천장）、釜山大学（プサンテハッキョ：부산대학교）、梵魚寺（ポモサ：범어사）がある。金井山の尾根には、韓国最大の山城である金井山城（クムジョンサンソン：금정산성）があった。金井山城は、かなり古くからあったとされ、18世紀には城の縄張りとして約17kmの石垣が築かれた。豊臣時代の文禄・慶長の役や日本の植民地時代に破壊されたとされているが、石垣と門は復元されて現在に至っている。

釜山大学の近くからバスで東門まで登り、そこか

ら尾根を北に縦走して山頂の姑堂峰（コダンボン：고당봉）を目指す。途中には、山城の石垣があり、東西の景色を楽しむことができる（図-3）。道はよく整備されている。標高802mの姑堂峰からは、南は海、西は洛東江、東は釜山大学周辺の街並みや日本人が植民地時代に建設した回東水源地（フェドンスウォンチ：회동수원지）を見渡すことができる。その近くには、金井山の名がついた金泉の岩場がある。その後、山を徐々に下り、中腹にある梵魚寺に到着する。梵魚寺は、新羅時代の678年に建立されたとされ、韓国禅宗の総本山である。梵魚寺の停留所からバスで地下鉄駅まで行くことができる。東門から梵魚寺までの総距離は約8km、標高差は約300mである。



図-3 カルメッキル第7コース 金井山
金井山城の石垣を見ながら山頂の姑堂峰を目指す。

②第2コース（二岐台）

広安里（クァンアンリ：광안리）から五六島（オリュクド：오륙도）までの海岸線コースは、海の景色を満喫でき、釜山市民からの人気が高い。海辺の岩場の上には、安全に歩くことができる遊歩道が整備されている（図-4）。ただし、アップダウンは繰り返される。出発は、地下鉄南川駅とし、広安里の浜辺近くのスーパーマーケットを経由してコースに入り、ゴールの五六島を目指した。南川駅から五六島までの総距離は約7.2km、標高差は約180mである。

コースの途中には、二岐台（イギデ：이기대）がある。二岐台の名称は、文禄・慶長の役の際、武功を挙げた日本の武将が景色の良い高台で祝宴を催した際、二人の妓生（キーセン：기생）が酒に酔った

武将を介抱するふりをして抱き着き、そのまま崖下に身を投げたことに由来するとされている。また、コース途中には恐竜の足跡やノンパウィ (농바위) という奇岩がある。この一帯は、国防上の理由から、かつては民間人が立ち入ることが許されず、いまだに見張り台や塹壕が残っている。

ゴールとした五六島は、潮の満ち欠けで島が5つや6つに見えることからその名が付けられた観光地である。海岸の崖から海にせり出したガラス張りのスカイウォークは、足元から水面が見える人気のスポットである。五六島は、北朝鮮との国境である高城まで海岸線に沿って歩くことのできるヘパランギルの出発点である。カルメッキルの第1コースと第2コースは、その一部分を担っている。



図-4 カルメッキル第2コース 二妓台
海岸の崖に遊歩道が整備されている。このコースはヘパランギルの一部でもある。

(3) 公共交通機関による移動

現地専用車を借り上げると、融通が利き実習そのものは運営しやすくなるが、1日当たり10万円程度の経費が上乗せされる。韓国の地下鉄や路線バスの運賃は日本と比べてかなり割安であるため、バスのチャーターはやめ、公共交通機関による移動を選択した。

初めての韓国訪問の場合、地下鉄は、切符の購入で多少つまずいたとしても乗ることはできる。地下鉄は、乗客の様子や車内の雰囲気を観察することで異文化理解につながるが、街の風景を一切楽しむことができない。一方で、路線バスは、地下鉄とは比べようのない量の街の情報を得ることができる。また、韓国は信号が少なく、渋滞に巻き込まれることはあまりないので、日本のように時間がかかることもない。

ところが、初めての韓国で地下鉄は何とかなっても、行き先がハングルで表示されている路線バスに乗ることはまず不可能である(図-5)。漢字は主要な停留所でないとは記されていない。しかもバスが日本では想像のつかない速さで向かってくる。行き先のハングルを瞬時に読める語学力と、土地勘がなければバスに乗ることができない。

釜山の地下鉄や路線バスは、日本のスイカやパスモと同様、交通系ICカードで乗車できる(図-5)。交通カードがあれば、慣れない小銭の用意や切符の



図-5 釜山市内の路線バスと交通系ICカード

路線バスは行先がハングルで表示されている。ハングルがすばやく読め、しかも土地勘がなければ実際にバスに乗ることはできない。交通カードがあれば、すべての路線バスや地下鉄に乗車でき、小銭を用意する必要はない。各学生には1万ウォン(約千円)分をあらかじめチャージしたカードを配布した。

購入が不要となるため、不安をかなり解消できる。そこで、教員は事前の下見の際に、現地で交通カードを人数分購入し、10,000W（約1,000円）をチャージした上で各学生に配布した。韓国の運賃は、日本よりも安いので、これによっておおよそ2日間は移動できる。

さらに、教員は事前に行程をすべて下見し、バス停留所や地下鉄駅の位置、バスの便数、所要時間を把握した。最大の問題は、入国してすぐに荷物を持った学生とスタッフ合わせて29名が、宿泊先の海雲台行きの急行バスにどうやって乗るかであった。急行バスは、主要な停留所しか留まらないので、地下鉄並みの速度で移動でき市民から人気がある。そのため、釜山港から近い釜山駅前で乗ろうとしても、すでに満員状態であり、数人しか乗車できない。そのため、教員は、実際にバスに乗って調査し、始発点が地下鉄土城駅の近くの停留所であることをつきとめた。だが、急行バスに乗り込むためだけにフェリーターミナルから土城駅まで移動するのは意味がないため、そこからほど近い東亜大学博物館と臨時首都記念館を見学することにした。始発点は他の乗客がないので、全員が一度に乗車できたものの、学生が抱える大きな荷物に対して、バス運転手は嫌な顔もせず、置き場を配慮してくれた。その結果、学生は、地元客に迷惑をかけることなく、初めての路線バスに不安なく乗車でき、ハングルであふれた街並みを楽しむことができた。

(4) 実習中の安全の確保

本実習に参加した学生は、2～3名の友達関係で連れ立って参加していた。韓国は安全性の高い国ではあるが、何が起こるかは予測不能であるので、自由時間の単独行動を禁止した。それを破るような学生はいなかった。

とはいえ、安全確保のためには迅速な情報収集が必須となる。韓国は日本以上のインターネット社会であり、ホテルはもちろん、駅、百貨店、カフェや食堂など主要な場所にはWi-Fi環境が整備されている。個人旅行であれば、Wi-Fiルーターをレンタルしなくても、そういった場所を選んで活用すればまず困らない。しかし、本実習は参加学生が24名と多く、街中でトラブルに巻き込まれたり、体調不良で歩くことができなくなったなどの不測の事態をあ

らかじめ想定し、リスクを回避しておかなければならない。

そこで、教員は、釜山港の携帯ショップで、緊急連絡用の携帯電話8台とWi-Fiルーター5台をレンタルし、それぞれ5台を学生に配布した。特に、学生は、Wi-Fiルーターによってインターネット環境が確保できたので、国内にいる保護者や友人との連絡に支障がなく、初の海外であっても不安が解消したようであった。

(5) 暑熱環境への対応

暑熱環境下での実習であるため、食中毒、下痢、熱中症などで急激に体調を崩す学生が出る危険性がある。もし、そうした学生が一人出れば、予定していた実習を変更せざるをえなくなる。特に山の上で事故が発生すれば、本人だけではなく、全員を長時間暑熱下にさらすことになる。海外旅行が初めての日本人学生が12名もいたので、日本にいるときと同じような感覚に陥らず、海外にいるという緊張感をもって対処するよう強く指導した。

当たり前ではあるが、水道水を飲むことを厳禁とした。また、新鮮な刺身以外、牡蠣のキムチなど生ものは避け、唐辛子や香辛料に弱い者は、韓国料理をたくさん食べすぎないように指導した。

実習は7月中旬であり、猛暑となることも予想された。事前にウォーキング時には最低1ℓの飲料水を所持するよう徹底し、こまめに水分補給するように指導した。塩飴も適宜配布した。またウォーキング前には、食事をしっかりととり、食物から水分を吸収することも大切である。そのため、二日目と三日目は、唐辛子などの刺激物が比較的少ないカムジャタンとサムギョプサルをそれぞれ昼食としてとった後に歩くようにした。

実際には、釜山の最高気温は7月16日24.3℃、17日28.6℃、18日28.0℃と比較的涼しい気候にも恵まれたこともあって、全員が熱中症を起こさずに済んだ。

(6) 温泉宿での疲労回復

宿泊先には、温泉場と海雲台の温泉宿を選び、それぞれ1泊した。客室はすべてオンドル部屋を選び、3人一部屋を基本とはするが、部屋割りは学生たちにまかせた。両方ともに、日本のような温泉センタ

ーがあり、客室にも大きな湯船がある。ウォーキング後の疲労回復には入浴が最適であり、韓国の温泉センターに入るという異文化体験も新鮮であったようである。

(7) 実習スケジュール

このような入念な下準備をもとにして、表-1に示す実習スケジュールを構築した。初日は、17時までに港に集合し、出国手続きを経て関釜フェリー

に乗船し、船内で開講式をして解散。二日目は、下船して両替や朝食を取り、宿泊先の海雲台まで移動し、昼食の後にカルメッキル第2コース（二妓台）のウォーキング。三日目は、海雲台から温泉場へ移動し、釜山大学周辺を散策して昼食をとり、カルメッキル第7コース（金井山）のウォーキング。四日目は、夕方までグループでの自由研修とし、釜山港に集合して、船中で課題レポートを作成。最終日は、下船後、下関港で閉講式を行って解散とした。

表-1 事前調査によって構築した韓国ウォーキング実習

日程		実習内容	
初日	7/15 (金)	大学からバス 第一便 15:30 発 第二便 16:30 発 下関国際フェリーターミナル集合 開講式 17:10 18:00 関釜フェリー 乗船 出国手続き 船中泊	
	7/16 (土)	6:30 起床 各自朝食 8:00 関釜フェリー 下船 入国手続き。 両替、コンビニなど。現地ガイドと合流。 8:40 バスに乗車、地下鉄中央駅で下車。ロッカーの場所を確認。 9:00 地下鉄で中央駅から土城駅へ移動。 土城駅でロッカーに荷物を預ける。 臨時首都博物館（イムシスト パムルガン） 東亜大学校博物館 見学 10:30 土城駅に集合。荷物をもって9番出口からバス停（釜山大病院）へ。 1003番バスで海雲台温泉へ移動。約1時間。 11:30 海雲台 松濤湯（ソンドタン） チェックイン。ウォーキングの準備。 12:00 海雲台ビーチ近くで昼食（カムジャタン） 13:00 1003番バスまたは地下鉄で慶星大駅へ移動。 14:00 ウォーキング カルメッキル2コース 約7km 16:30 五六島 到着。 17:00 五六島 Sk view から 27番バスで慶星大入口へ。 17:30 慶星大→ホテルへ移動（1003番バスか地下鉄） 18:30 海雲台のホテル 松濤湯 到着。 各自 夕食。海雲台 松濤湯 泊	
二日目	7/17 (日)	7:00 起床 各自朝食 8:00 海雲台ホテルチェックアウト。荷物をもって地下鉄で温泉場駅へ移動。 9:00 温泉場の鹿泉ホテルに荷物を預けてチェックイン。 9:30 ホテル出発 釜山大学までゆっくりまち歩き。大学街を散策。 11:30 釜山大学周辺で昼食（サムギョプサル） 12:30 釜山大学周辺からバスで東門へ。 13:20 東門から北門に向けウォーキング。 東門～北門～姑堂峰（コタンボン）～梵魚寺（ボモサ） 約8km 17:30 梵魚寺の境内で集合。全員そろい次第、地下鉄駅までくだる。 18:00 梵魚寺駅→温泉場駅 地下鉄移動。 18:45 温泉場の鹿泉ホテルに戻る 各自 夕食。温泉場 鹿泉ホテル泊。	
	7/18 (月)	7:30 起床 各自朝食 荷物：ホテル・釜山駅・地下鉄・フェリーターミナル 各自で預ける。 9:00 釜山市内 グループ研修 各自 昼食 17:15 釜山国際フェリーターミナル 3F 集合 18:00 出国手続き 乗船 各自 夕食 レポート作成 船中泊	
	四日目	7/19 (火)	6:30 起床各自朝食 7:45 下船 入国手続き 8:20 閉講式

4. 韓国ウォーキング実習の実際

(1) 授業の位置づけ

経済学部の特設大学である本学は、経済学科・国際商学科・公共マネジメント学科の3学科を擁し、2,219名（うち外国人留学生42名）が在学している（2018年5月現在²¹⁾。本学では、必修科目であるスポーツ実践A（1単位）を含む健康・スポーツ関連科目群から3単位以上の単位取得が求められている。今回の韓国ウォーキング実習は、これら科目群の中に2016年度から新設された生涯スポーツa（1単位）であり、2年生以上が履修できる集中授業である。

引率者は、本学教員2名、およびV社添乗員や現地ガイドなど計5名であった。実習費用は、保険、港使用税、オイルサーチャージ、Wi-Fi レンタルなどをすべて含み37,500円であった。実習は、他の授業に差支えないよう、2016年7月の海の日をはさむ三連休を利用して行った。7月15日の金曜日夕方に出発し、19日の火曜日早朝に到着する4泊5日の行程である。

(2) 事前授業

韓国での実習に先立って、オリエンテーション（昼休み）、簡単なハングル会話と約6kmのウォーキング（土曜午後）、韓国事情の学習と6km程度のウォーキング（土曜午後）、直前の諸説明（昼休み）、計4回にわたり事前授業を行った。事前授業では、韓国は日本と肩を並べるほどの先進国であり、特にインターネットや交通インフラ、近年のウォーキングブームの点では日本を凌駕している側面もあるこ

とを伝えた。また、ほぼすべてがハングルで記載されているので、冷麺（ネンミョン：냉면）ぐらいのハングルは読めないと食堂で注文すらできないので、事前にハングルを勉強しておくように指導した。また、折に触れて日本人学生にはパスポートの取得、中国人留学生にはビザの取得を急ぐように指導した。

(3) 参加学生の特性

参加した学生24名の内訳は、図-6に示したように、男性14名・女性10名、2年生22名・3年生2名、日本人学生15名・留学生9名であった。

日本人学生15名のうち、12名は初海外であって、まずはパスポートを申請し取得することからのスタートであった。パスポート所有者3名は、いずれも学童期に保護者に連れられて海外旅行をして以降、自身で意図して渡航した経験はない。韓国訪問経験者は2名に過ぎなかった。4名の日本人学生は、本学の朝鮮語の授業を履修しており、ある程度のハングル能力を有していた。

留学生9名の内、8名は中国人であり、すべて韓国は初めての訪問であった。残りの1名は釜山市近郊の金海市出身の韓国人であるがカルメッキルを歩いた経験はなかった。

(4) 実習の実際

本実習の実際は、表-2に示した。二日目は、昼食後にカルメッキル第2コース（二枝台）を歩く予定であった。しかし、午前10時頃から小雨が降り始め、昼食時には大雨になった。そのまま決行することも考えたが、スタッフで協議した結果、本来予定していた四日目の日程と急遽入れ替えて、午後か

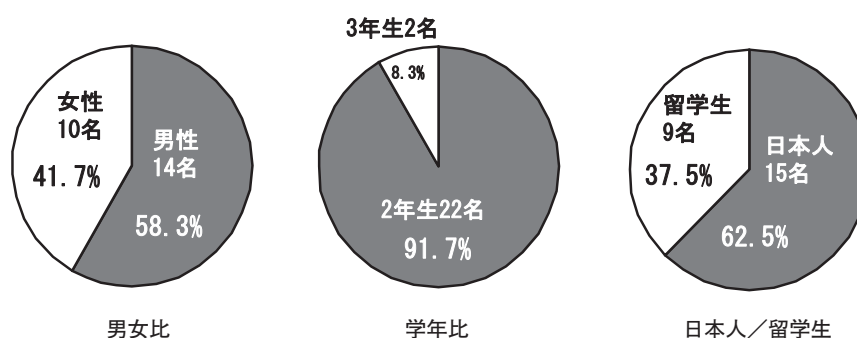


図-6 韓国ウォーキング実習（生涯スポーツA）の参加学生（24名）の内訳

らはグループ研修に変更した。昼食時には、Wi-Fi ルーターと携帯電話を学生に配布し、緊急時の電話番号も伝えた。

雨は、午後2時頃から激しく降り、午後4時頃までの2時間は視界をさえぎるほどの豪雨となった。仮に決行していれば、海岸線を歩くウォーキングの最中であり、低体温症や転倒などの事故の発生につ

ながる危険性もあった。釜山の初日から大雨に打たれて嫌な印象を学生に与えることもなかったため、これは適切な判断であったと考える。

三日目は、晴天に恵まれた半面、熱中症の危険もあった。しかし、大幅に遅れたり、体調を崩す者はなく、全員が予定通りにカルメッキル第7コース（東門～梵魚寺）を完歩した（図-7）。四日目も晴天

表-2 韓国ウォーキング実習の実際

	日程	実習内容の実際	本来の予定
初日	7/15 夕方 (金)	下関港集合 開講式・出国手続き・関釜フェリー乗船 ミーティング・各自夕食・入浴 船中泊	実際と同じ
二日目	7/16 朝 (土) 午前	起床・各自朝食・下船・入国手続き・両替・買い物 バス・地下鉄で移動、臨時首都博物館・東亜大学博物館見学 バスで移動、海雲台温泉 松濤湯 チェックイン	実際と同じ
	午後	昼食、ミーティング、携帯・Wi-Fi ルーター配布、 豪雨のためグループ研修に変更 各自夕食・入浴 温泉宿泊	二岐台を歩く
三日目	7/17 朝 (日) 午前 午後 夕方	起床 各自朝食・チェックアウト・地下鉄で温泉場へ移動 鹿泉ホテル チェックイン、釜山大学周辺散策 昼食、ミーティング、バスで金井山東門まで上がる。 東門～姑堂峰～梵魚寺 約8km 歩く、全員の安全確認。 バスと地下鉄でホテルへ移動、各自夕食・入浴 温泉宿泊	実際と同じ
四日目	7/18 朝 (月) 午前 祝日	起床 各自朝食、チェックアウト、 地下鉄とバスでフェリーターミナルへ移動。荷物を預ける。 バスと地下鉄で出発点（南川駅）へ移動。 ウォーキング開始 南川～二岐台～五六島 約8km 歩く	グループで釜山市内研修
	正午 午後 夕方	五六島で全員の完歩を確認・解散 各グループで昼食 各グループで昼食、夕方までグループ研修 夕方釜山港集合・点呼 集合・出国手続き・フェリー乗船 ミーティング・各自夕食・入浴 船中泊	
五日目	7/19 朝 (火)	起床 各自朝食、下船、入国手続き、 下関港で閉講式 8:15 解散	実際と同じ

※二日目の午後から豪雨に見舞われた。本来は、カルメッキル第二コースをウォーキングする予定であったが、四日目に予定していたグループ研修と内容を入れ替えた。第二コースは四日目の朝から歩いた。ゴシック太字とグレー示した部分が、本来の予定から変更した部分。それ以外は予定から変更なし。



図-7 カルメッキルを歩く学生たち

となり、午前中にカルメッキル第2コース（地下鉄南川駅～二妓台～五六島）を踏破した（図-7）。その後、出港までの数時間、昼食やショッピングを各グループで思い思いに楽しんだ。全行程を通して、病気やケガ、体調不良もなく無事に帰国の途についた。

実習行程は、二日目の大雨によるプログラム入れ替え以外は、予定通りに進んだ。これは、周到な下見と念入りな打ち合わせにより、構築した実習自体の精度が高かったためと考えられる。

5. 学生の国際意識に関する気づき

(1) 日本人学生

帰国時のフェリー乗船後にレポート課題を課し、「韓国に来て強く感じたこと」というテーマで自由記述させた。表-3には、その中に表現された内容をカテゴリーに分け、日本人学生の記述が多い順に示した。

誰しも異文化に触れた時に、それまでの自分の「常識」が通用しないと、その異文化を強く印象づ

表-3 レポートの記載内容からみた国際感覚に関する学生の気づき

国際感覚の気づき		日本人	中国人
自身のコミュニケーション力・世界観	もっと外国を知りたいと思った	7	1
	ノンバーバルコミュニケーションの重要性を感じた	6	0
	言葉が通じないことへのもどかしさと不安	4	0
	案外日本語が通じた	4	0
	少しハングルが話せるようになった	3	0
	ハングルの学習しようと思った	3	0
	他の国ならば韓国以上に意思疎通に苦労する大変だろう	2	0
国民性・文化	優しく迎え入れてくれた 韓国人は親切だ	9	2
	日本人と比べて自己主張が強い	7	5
	コンビニなどの店員の対応や態度が悪い	7	2
	車の運転が荒い	6	0
	文化的には日本と似ている	3	1
	カップルが情熱的	2	0
	プライドが高い	1	0
	私服で運転する運転手 若者が高齢者に席を譲る 女性の運転手が多い	1 1 1	0 0 0
インフラ・環境	地下鉄駅のホームドアの完備	2	0
	街中の独特の臭いや下水の臭いがきつい	2	1
	道や空気が清潔ではない	2	1
	車線が多い	1	1
	ICカードの発達	1	1
	交通費が安い	1	1
	大学の博物館が素晴らしい 釜山大学が素晴らしい	1 0	0 3
料理	やはり辛かった	3	1
	おかずのお替りありが素晴らしい	2	0
	箸が重い	1	0
	おいしかった	0	3
発展性	釜山は想像以上に大都会だ	4	1
	ウォーキング観光が素晴らしい	2	0
	日本と発展度合いに大差ない	1	1
	グローバル化はおもしろくない・特色がない	1	0
韓国に対する先入観・両国の歴史	韓国の悲しい歴史が知ることができた	8	0
	日本の支配の歴史を垣間見た	5	0
	想像していたほどの反日感情はない	5	0
	不潔なイメージが消えた	1	0
日本の再発見	日本人はおもてなしに優れている	3	2
	日本人は謙虚	2	3
	改めて日本の良さを知れた	2	3

※各学生の自由記述によるレポートからカテゴリーに分けて集計した。日本人学生の記述内容が多い順に示す。日本人学生は15名、中国人留学生は8名、韓国人留学生は除いた。

けられるものである。日本人学生で最も多かったのは、「韓国人は優しく迎え入れてくれた。韓国人は親切だ。」という記述であった。これは、「想像していたほどの反日感情はない」という気づきと関連するものである。

その反面、「自己主張が強い」、「店員の接客態度が悪い」、「車の運転が荒い」といった日本人にはあまり見られない韓国人の特性に対する気づきも多かった。こうした日韓の比較から、改めて日本人の長所でもある「おもてなし精神や謙虚さ」に気づいたものと考えられる。

また、自己のコミュニケーション能力の不足に気づいた者も多かった。本学で朝鮮語を学習した数名の学生たちは、「大学で習ったハンゲルが通じてうれしかった」という感想を述べていたが、それ以外の大部分の学生は、言葉が通じず自分の意思を伝えられないことへのもどかしさを痛感したようである。しかし、この経験をもとに、「ハンゲルを勉強したい」とか、「他の国にも行ってみたい」などの意欲的な記述もみられた。

(2) 留学生

中国人学生は、街中を歩いてもハンゲルの看板を除けば自国と似た風景に映るようであり、「韓国は中国とよく似ています」としきりに語っていた。レポートのなかにも、「韓国は日本と中国の間ぐらいの感じだった」という気づきを半数が記載していた。

中国語も日本語も話せる彼らにとっては、ノンバーバルコミュニケーションも含めてコミュニケーションには日本人学生ほどの苦労はなかったようである。中国人学生は、日本人学生と同様に、韓国人の親切な人柄には好感をもったが、その反面で自己主張の強さや接客態度の悪さを指摘していた。また、日本人学生からは指摘のなかった釜山大学の素晴らしさや韓国料理のおいしさなどの気づきが表現されていた。

全体的には、この実習によって日韓両国を客観的に比較し、改め

て留学先の日本の良さを再認識したという点が特徴的であった。韓国人学生は、故郷への里帰りという側面もあったが、日本人や中国人の学友から「韓国をどう見ているか」についての率直な意見を聞き、自国の強みと弱点を客観的に評価できた良い機会となったとの感想を述べていた。

6. ウォーキングの感想

表-4は、カルメッキル第7コース（金井山）を歩いた感想を日本人学生（15名）と留学生（9名）に分けて示した。最も多かったのは、「充実感・達成感」21名であり、次いで、「景色が素晴らしい」17名と続いた。はるか先に見える標高802m山頂（姑堂峰）を目指して、「アップダウンがきつい」と10名が感想を述べた尾根を縦走していく（図-7左）。山頂に到達した学生たちの表情は達成感に満ちていた（図-8）。

表-5は、カルメッキル第2コース（二岐台）を歩いた感想を示した。こちらは、20名の学生が、「アップダウンがきつい」と評した。その反面で、美しい海岸線の景色を愛でたり（図-7右）、充実感や達成感も得られたようである。

2日間のウォーキングの体験を通して、「また歩いてみたい」、「山登りに挑戦してみたい」という積極的態度を示す学生も4名いた。



図-8 金井山の山頂（姑堂峰）での達成感に満ちた学生たち

表-4 カルメッキル第7コース（金井山）を歩いた感想

ウォーキングの感想	日本人学生	留学生	合計
充実感・達成感	13	8	21
景色がすばらしい	11	6	17
アップダウンがきつい	7	3	10
日本の支配の爪痕	6	0	6
韓国の歴史を知った	6	0	6
楽しい	5	4	9
うれしい	4	0	4
心地よい	3	0	3
カルメッキルのすごさ・整備	3	0	3
韓国ウォーカーとのふれあい	2	0	2
仲間の励まし	2	3	5

※各学生の自由記述によるレポートから日本人学生の記述内容が多い順に示す。日本人学生は15名、留学生は9名。

表-5 カルメッキル第2コース（二岐台）を歩いた感想

ウォーキングの感想	日本人学生	留学生	合計
アップダウンがきつい	14	6	20
充実感・達成感	11	6	17
景色がすばらしい	9	7	16
戦争の爪痕を感じた	5	0	5
たのしい	5	3	8
心地よい	3	1	4
うれしい	3	2	5
韓国ウォーカーとのふれあい	3	1	4
カルメッキルがすごい	1	1	2
仲間の励まし	1	2	3

※各学生の自由記述によるレポートから日本人学生の記述内容が多い順に示す。日本人学生は15名、留学生は9名。

7. おわりに

近年の日本人学生にみられる「内向き志向」にかかる日本の将来に対する懸念について、太田（2014）³⁾は次のように述べている。

「日本人の海外留学生離れという現象自体は、グローバル化する世界で日本の存在感を危うくする。国際舞台で堂々と自らの意見を発言し、世界を唸らせるようなグローバル人材が育たないことは、対外的な情報発信力を弱めるだけでなく、日本の競争力と魅力の低下につながり、海外の影響のある人物や有能な人材を日本に惹きつけることができなくなることをも意味する。」

体育教員は、担当する授業のなかで、釜山はグローバル化に順応する最適な練習の場であると学生たちに伝えている。ところが、「怖い」、「日本がいい」、

「行きたくない」、「海外はいやだ」、「興味がない」などの拒絶反応を示す学生が少なからずいることは事実である。「現代社会に適応しうる創造的で教養豊かな高度職業人」の養成を自認する大学でありながら、太田の指摘する学生の「内向き志向」³⁾の浸潤を払拭することはできない。いくら教員が海外事情を座学で教え込んだところで、内向きの学生に伝わるわけがない。やはり、「百聞は一見に如かず」のことわざ通り、実体験に勝るものはない。

参加した日本人学生の大部分は初の海外旅行であった。日本人が抱く韓国人のイメージについて、ハングル未学習の日本人学生を対象として調査した先行研究は、「反日・日本嫌い」が15%で最も高いことを報告している²²⁾。本学の学生も、程度の差こそあれ、同様なイメージを抱いていたものと推測される。しかし、迷ったときに一緒に歩いて道案内をしてもらったり、少し日本語ができる人から食堂の注文を手助けしてもらったりするなどの実体験をした学生は、「日本人に敵意を持っている」という先入観の誤りに気づき、「日本人以上に親切だ」と認知を改めた。こうした意識の変容から、ウォーキングコース上に散在する日本の負の遺産について、韓国人ガイドから受けた説明を聞き入れ、「韓国の悲しい歴史を知った」ものと考えられる。また日本人学生の多くは、海外でのコミュニケーション能力不足を強く認識していた。意思が通じないことへのもどかしさは、「もっと外国を知ろう」、「もっとハングルを勉強しよう」という挑戦的な意欲に転化する契機になったものと推測された。これらのことから、本実習は、日本人学生の国際感覚の涵養に一定の成果があったものと考えられる。

中国人学生は、すでに国際感覚がある程度備わっており、彼らが自国に似ていると感じる韓国でのコミュニケーションには支障がなかったようである。だが、彼らのほとんどが、コンビニエンスストアなどでアルバイトをしているせいか、携帯端末を操作しつつレジを扱うアルバイト店員やテーブルにどんと料理を置くなどの接客態度の悪さを指摘していた。日韓を客観視できる中国人学生は、改めて日本人のおもてなしや謙虚さを再発見したようである。

一方、スポーツ庁が2万人を対象として行った「スポーツの実施状況等に関する世論調査」(2016)²³⁾によると、1年間に行った運動・スポーツの種目は、

ウォーキングが38.7%で最も高く、体操(15.0%)、トレーニング(14.0%)、ランニング・マラソン・駅伝(10.4%)の順で続く。運動やスポーツが個人や地域にもたらす価値については、健康・体力の保持増進が73.3%で最も高く、次いで精神的な充足感(38.2%)、人と人との交流(37.1%)、リラックス・癒し・爽快感(27.7%)、達成感の獲得(25.7%)の順である。これらのことから、本実習に参加した学生は、いずれはウォーキングを生涯スポーツとする可能性が高くなるものと推測される。また、これを生涯スポーツとして継続するためには、「健康・体力の保持増進」はもちろんであるが、スポーツのもたらす充足感、他者との交流、爽快感、達成感といった精神的・社会的効用が求められると考えられる。金井山や二岐台コースのアップダウンには閉口しながらも、美しい景色に感動しながら、学友と励ましあってゴールに到着したときの爽やかな気分、達成感や充実感は、強烈な体験となって学生たちの脳裏に刻まれたことであろう。ウォーキングが、今すぐに生涯スポーツにつながらなくても、学生たちが10年、20年と年齢を重ねて、運動の必要性を身に染みて感じたときに、この体験がウォーキングを始める契機となることは期待できよう。

これまで報告されている海外での大学体育授業のうちの二件は、スポーツを専攻する学生を対象とした、アメリカ(ハワイ)でのマリンスポーツの実習¹⁴⁾とオーストリアでのスキー実習¹⁵⁾である。一般的な学生を対象とした海外実習は、東海大学が1997年度から始めたハワイでのマリンスポーツ実習が報告されている¹⁶⁾。これは、現地で8日間を過ごし、ダイビングやシーカヤックなどのマリンスポーツ体験だけではなく、英語による授業やハワイの文化を学ぶ機会を含み、国際理解が深まるよう工夫がなされている。ただし、この海外実習は、ハワイにある東海大学のパンフィックセンターでの宿泊や研修スタッフの支援といった東海大学の資源をフルに活用したものであって、他大学がそれをモデルとして容易に実施できるものではない。また、マリンスポーツは、爽快で解放感が得られるという利点の反面、用具や装備にかかる高額な費用、海へのアクセス、季節や天候の影響、また実施頻度が限られるという点で、多くの学生にとって生涯スポーツには結びつきにくい。さらに、多額の実習費を工面できる学生が

限られてしまい、あまねく参加を呼びかけるには無理があると言わざるを得ない。

本実習は、生涯スポーツとして学生たちに最も結びつきやすいウォーキングを海外でしかも安価で実施するものである。海外ウォーキング実習は、調査できた範囲内では他大学における実施実績はなく、これが初めてと考えられる。

ウォーキング実習は、海外に出なくても国内でも実施できる。例えば、下関から比較的近いウォーキング専用道には、2017年度末現在17コースをもつ「九州オルレ」⁹⁾がある。九州オルレは、インバウンドの観光や地域活性化の学修に適している。また、東日本大震災で津波被害を受けた気仙沼市や東松島市にコースがある「宮城オルレ」²⁴⁾は、災害からの復興過程や地域の人々の想いを学修する良いモデルである。ただし、これらは、体育授業というよりも、本学の公共マネジメント学科のような地域に根ざした事業を専門的に学ぶ学生向けに、ウォーキングを通じた地域学修実習として構築すべきである。

本実習は、ウォーキング専用道「カルメッキル」をもつ釜山へのアクセスが良好な下関市の資源を活用して構築している。だが、本来であれば、九州オルレや宮城オルレの出発点である「済州オルレ」²⁵⁾で行うべきである。済州オルレは、年間100万人以上のウォーカーが訪れるほどの「徒歩旅行」ブームを生み、済州観光のスポーツツーリズムとしてすでに確立されている⁸⁾¹⁰⁾。だが、済州島には、福岡空港から直行便はなく、関西空港から行くしかない。仮に、下関から関釜フェリーで釜山港に入り、金海空港から搭乗すると、済州に着くのは翌日の午後から夕方になり、その日のウォーキング実習は不可能である。となると、釜山～済州間の移動に二日が付加されてしまう。関西空港からの直行便を使っても状況は同じである。だが、済州オルレは、こうした余計な時間や経費を含めて考えても、経済学を専攻する学生にとって、ビジネスモデルとして学ぶ価値のあるスポーツツーリズム¹⁰⁾であり、今後実現に向けて検討していきたい。

以上のように、韓国に近い大学立地と釜山市の歩行道「カルメッキル」を活用した本実習は、安全性と利便性に優れており、学生たちの生涯スポーツへの契機や国際理解にも一定の成果があったものと考えられる。今回の海外実習は、他大学においても実

施可能であり、市民向けのスポーツツーリズムとしても応用可能である。今後とも、より多くの学生たちが参加を希望する海外ウォーキング実習となるようプログラムを精査していきたい。

(注1) 生涯スポーツ

文部科学省は、「我が国の文教施策」において、生涯スポーツの意義について、「青少年がスポーツを行うことは体力・運動能力の向上、体の健康のみならず、身体を動かすことによる爽快感など心の健康にも役立つものである。また、スポーツはルールに基づいて行うものであるから、青少年に社会性の基本とも言えるルールを尊重する精神を根付かせるとともに、他者との協同は他人への思いやりをはぐくむ重要な機会でもある。」と述べている²⁶⁾。

また、山口(1989)は、「生涯わたる各ライフステージにおいて、生活の質(QOL)が向上するために自分自身のライフスタイルに適した運動・スポーツを継続して楽しむこと」と定義している²⁷⁾。

引用文献

- 1) 国土交通省九州運輸局；平成28年度日韓旅客定期航路の旅客輸送実績について～リーマンショック後、最高を記録～。
<http://www.tmlit.go.jp/kyushu/content/000017269.pdf#search=%27E4%B8%8B%E9%96%A2+%E9%87%9C%E5%B1%B1+%E8%B7%9D%E9%9B%A2%27>, (参照2018-09-08).
- 2) 公立大学法人下関市立大学；公立大学法人下関市立大学第2期中間目標.<http://www.city.shimonoseki.lg.jp/www/contents/.../59a7af2a003.pdf>, (参照2018-09-08).
- 3) 太田浩；日本人学生の内向き志向に関する一考察—既存のデータによる国際指向性再考—。留学交流，2014年7月号 Vol. 40, pp.1-19, 2014.
- 4) 文部科学省 高等教育局学生・留学生課留学生交流室課；「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について。2017-12-27,
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm, (参照2018-09-09).
- 5) 小笠原正志, 中嶋健, 入江由香子, 松崎守利ら；健康的なライフスタイルを習慣化するプログラムを織り込んだ大学体育授業～健康になりま帳を介した教育方法の提案～。下関市立大学産業文化研究所所報, Vol. 17, pp.27-37, 2008.
- 6) 厚生労働省；平成26年度健康増進普及月間の実施に

ついて。

<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000054955.html>, (参照2018-09-09).

- 7) スポーツ庁健康スポーツ課；平成29年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」について。2018-02-27,
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/001_index/bunkabukai002/attach/_icsFiles/afielddfile/2018/03/02/1401662_1_2.pdf, (参照2018-09-09).
- 8) 小笠原正志, 中嶋健；民間非営利団体が創設し運営管理する済州島周回長距離トレイル「済州オルレ」徒歩旅行ブームの解明。スポーツ産業学研究, Vol.25, No.1, pp.61-73, 2015.
- 9) 入江由香子, 吉田裕人, 李唯美, 小笠原正志；韓国の人気トレイル「済州オルレ」を取り入れて韓国と国内からの誘客を狙う「九州オルレ」の実態～創設と発展過程に関わるキーパーソンに着目して～。観光まちづくり学会誌, Vol.14, pp.43-55, 2017.
- 10) 入江由香子, 吉田裕人, 小笠原正志；グローバルな社会変革を起こす韓国発信のスポーツツーリズム「済州オルレ」の持続可能なビジネスモデル。スポーツ産業学研究, Vol.28, No.4, pp.345-355, 2018.
- 11) 녹색관광과；전국에 조성된 도보여행길, 체계적 관리 추진. 문화체육관광부, 2013-07-10,
http://www.mcst.go.kr/web/s_notice/press/pressView.jsp?pSeq=12854, (参照2018-02-26).
- 12) 부산광역시；건강정보갈맷길소개. <https://www.busan.go.kr/health/galmaetgil01>, (参照2018-08-08).
- 13) 사단법인 한국의길과문화；해파랑길.
<http://www.haeparangil.org/services/index>, (参照2018-08-08).
- 14) 西野仁；海外スポーツ理論及び実習A：海外スポーツ理論実習（マリンスポーツ）について。東海大学紀要 体育学部, Vol. 30, pp.106-108, 2001.
- 15) 内山秀一, 宮崎康文；世界一のスキー実習：海外スポーツ理論及び実習B（ウインタースポーツ），海外スポーツ理論実習（ウインタースポーツ）。東海大学紀要 体育学部, Vol. 30, pp.109-110, 2001.
- 16) 松本秀夫, 吉岡尚美, 山田洋；東海大学におけるマリンスポーツ実習（海外）に対する取り組みについて。東海大学紀要 体育学部, Vol. 38, pp.257-264, 2008.
- 17) 柳教烈；帝国と植民地の労働力移動と管理—関釜連絡船を中心に—。九州国際大学経営経済論集, Vol.18, No.1, pp.31-53, 2011.
- 18) 부산광역시；통계 DB 조회.
http://stat.kosis.kr/statHtml_host/statHtml.do?orgId=202&tblId=DT_201&conn_path=I2&dbUser=NSI_IN_202&language=en, (参照2018-09-10).

- 19) 구례군; 지리산둘레길소개. <http://www.gurye.go.kr/jirisan/dule/01/index.jsp>, (参照 2018-09-10).
- 20) 박창희; “이름은 압축된 시... 애정갯고 불러주었으면” 부산해안길명칭공모 `갈맷길` 당선증호씨. 국제신문, 2009-05-27, <http://www.kookje.co.kr/news2011/asp/newsbody.asp?code=2100&key=20090528.22025215143>, (参照 2018-09-08).
- 21) 下関市立大学; 大学の概要. http://www.shimonoseki-cu.ac.jp/handbook/idea_history.html#gaiyo, (参照 2018-09-16).
- 22) 尹秀美, 南相璵; 日本人の韓国人に対するイメージに関する調査研究: 金沢大学学生の「初習言語」学習者間の比較を通して (その3). 言語文化論叢, Vol. 20, pp.115-140, 2016.
- 23) スポーツ庁; スポーツの実施状況等に関する世論調査. 世論調査報告書 平成 28 年 11 月調査. http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/_icsFiles/afldfile/2017/02/15/1382031_001.pdf#search=%27%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%84+%E7%B6%99%E7%B6%9A+%E7%90%86%E7%94%B1%27, (参照 2018-09-24).
- 24) 宮城県観光課観光産業振興班; 宮城オルレの協定締結調印式について (観光課). 宮城県, 2017-11-02, <https://www.pref.miyagi.jp/release/orure20171102-1.html2017>, (参照 2018-09-26).
- 25) 사단법인제주올레; 올레여행. <https://www.jejuolle.org/main.do>, (参照 2018-09-08).
- 26) 文部科学省; 第3節生涯にわたるスポーツライフの実現 1 生涯スポーツの意義. http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad199801/hpad199801_2_017.html, (参照 2018-09-08).
- 27) 山口泰雄; 生涯スポーツの考え方と理論的枠組み. 生涯スポーツの理論とプログラム報告書 鹿屋体育大学, pp.1-14, 1989.